第三章

基本構想のコンセプトと基本方針

（1）南城市歴史文化まちづくりコンセプト

1）南城市の歴史文化を読み解くキーワード

南城市の文化遺産を知る上で、特に重要である事柄は以下のように整理できる。

①琉球開びゃくの神話、穀物起源の神話が伝えられ、国の基幹をなす民と農業が定着した

- アマミキヨ・シネリキヨという女男の夫婦神が国造りをした神話が伝えられており、『琉球神道記』（1608年）にも記録されている。沖縄学の祖である伊波普猷はこれを「天孫氏」ととらえ、史実の反映と解釈し、その考え方は後学にも受け継がれ、現在の沖縄人のルーツの一つだと考えられている。
- 久高島はアマミキヨが天から降りてきて国造りを始めたとされ、ヤハラヅカサはアマミキヨが初めて上陸した地点だと伝えられている。その後アマミキヨは、浜川御嶽を経てミントングスク、玉城グスク、知念グスクへと歩みを進めていったとされる。
- 穀物起源の神話が伝えられる地域であり、久高島、受水走水、三穂田などは穀物起源神話に登場し、親田御願（儀礼）、稲摺節（歌謡）などの関連する無形の文化遺産もある。中国から稲穂を運んだとされる鶴の骨は長らく玉城殿内で祀られていたと伝えられている。
- アマミキヨ以前にも沖縄には人が住んでいたが、南城市は沖縄に人類が定着する過程がうかがえる貴重な地域である。沖縄県内に人間が住み始めたのは3万2000年頃からで、旧石器人骨の代表的な「港川人」（約1万8000年前）は、隣接する八重瀬町具志頭で発見されており、南城市でも玉城字前川の琉球石灰岩壁から約2万年前と想定される鹿の化石（骨を利用か）が発見されている。
- 南城市の貝塚時代前期の遺跡は丘陵上の台地や台地縁辺部の崖下などに立地するのが特徴で、17カ所確認されている。貝塚時代後期後半は堀川貝塚を除く9カ所の遺跡が丘陵上に所在しており、貝塚時代の終焉頃に流通した無文の土器が出土している。
- 玉泉洞（武芸洞）から約3000年前の石棺墓と人骨が発見されているが、沖縄県で洞窟の中から石棺墓が見つかったのは初めてのことである。

②グスクとその領主たる按司が割拠し、尚巴志による三山統一（＝琉球王国誕生）の拠点となった

- 12世紀頃になると農耕が本格的に定着し、鉄器によって生産性が拡大したことで、共同体を束ねる按司が台頭し、集落や聖域を内包しながら防御性をもつグスクを構えるようになる。南城市ではグスクが丘陵上に立地し、各グスクを中心に同時代の遺跡が分布していることが特徴である。
- 500平方㍍前後の小型グスクから次第に大規模化と多郭化が進み、グスク時代の晩期には3万平方㍍を超える巨大化したグスクに成長したものもある。大型グスクに隣接して、領主だった按司の墓やその家族の墓が分布している。
- 琉球開祖のアマミキヨ（天孫氏）が居住したと伝えられるグスクが分布し、「神降れはじめのぐすく」などオモロにも謳われ、当時の政治的文化的中心地だったと考えられる。また、舜天王統の三代義本王が玉城に下った伝説、英祖王統の四代玉城王の配置など、三山時代以前の古王統の物語がある。
- 1429年の尚巴志による三山統一により琉球王国が誕生した。佐敷上グスクを拠点とした尚巴志は、浦添にあった中山を平定した後、拠点を首里城に移して第一尚氏王統を樹立する。第一尚氏は尚思紹王を始祖とし、7代63年間（1406年～1469年）続いた琉球最初の統一王朝である。
- 下の世の主（一説では南山王）の居城だった島添大里グスクは、物見台的な機能としてミーグスク、ギ

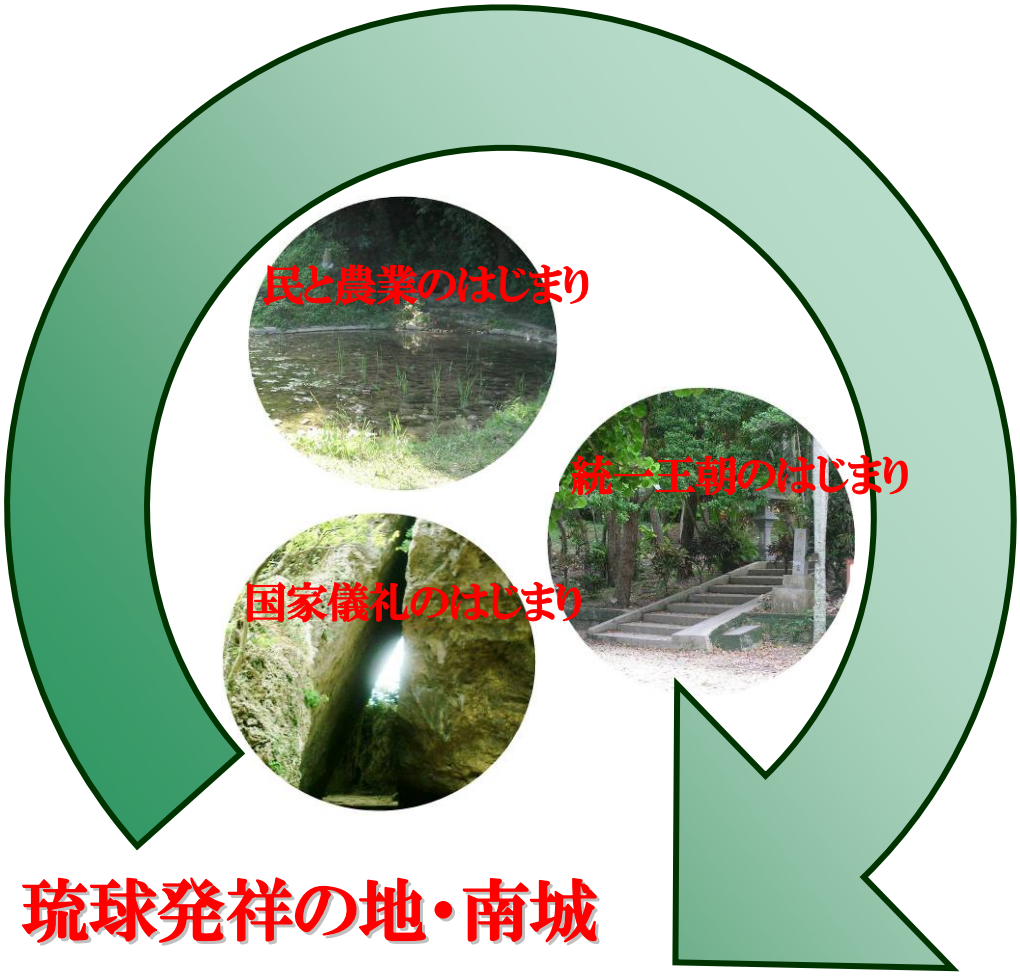
リムイグスクを配し、その内側に集落や農地が形成されるなど規模が大きいもののひとつである。佐敷上グスクは、三山を統一し琉球王国を興した尚巴志の居城とされ、グスク周辺をはじめ字佐敷、字手登根、字屋比久には尚思紹・巴志の家族に由来する史跡が点在している。

- 玉城グスク、糸数グスクは英祖王統4代の玉城王に由来している。知念グスクは中世～近代にかけて建築物が城内外でみられ、土器、輸入陶磁器、銭貨、金工品などの遺物が出土している。14世紀頃に大城按司の居城した大城グスクは規模の大きなグスクだったが、島添大里按司との戦で敗れて落城した。

③王国の統治体制が整えられ国家儀礼が行われるようになり、それを追認する東御廻りがはじまった

- 神話に登場する久高島及び知念・玉城は、琉球王国の国家儀礼の場とされ、琉球国王や聞得大君らが巡拝に訪れる地だった。琉球には国王をテダ（太陽）とする思想があり、太陽が生まれる東を聖なる方向ととらえたため、首里の東に位置するこれらの地域は王権とつながりが深かった。
- 琉球国王及び聞得大君はかつて旧暦2月の麦のミシキョマ（初穂儀礼）のため久高島に行幸した（隔年）。国王の久高島行幸は1673年より名代派遣をもって代えられたが、聞得大君による参拝はその後も続けられた。旧暦4月の稲のミシキョマの際には、知念・玉城を訪れたとされる。
- 聞得大君の就任儀式「御新下り」は斎場御嶽で夜篭りをして御名付けを受ける儀式であり、初代の1470年から15代の1875年まで行われた。聞得大君は琉球国王のオナリ神であり、王国の宗教体制の頂点に位置する最高神女である。かつては久高島で行われたとする説もある。
- 斎場御嶽は琉球の最高聖地と位置づけられた御嶽で、最奥部の三庫理など首里城内と同じ名前の拝所があることが特筆される。斎場御嶽は2000年11月、首里城跡などとともに、琉球王国のグスク及び関連遺産群として世界遺産（文化遺産）に登録されている。
- 1469年、首里城のクーデターにより第一尚氏が滅び、第二尚氏王統が始まる。第3代の尚真王によって地方領主の首里集住、身分制度や神女組織の確立など中央集権体制が強化され、これに伴い、グスク内の御嶽や集落の起源の屋敷が改めて聖地・要所として再定義され、年中祭祀などに巡拝されるようになる。
- 東御廻りは、稲のミシキョマをモデルとしてアマミキヨにゆかりのある地を付け加え、門中という親族組織がこれらを巡る神拝みの行事としたもので、従来は旧暦８～10月頃の農閑期に数年越しに行われてきた。これには王府による士族家譜の作成管理や、門中化の進展などが大きく影響していると考えられる。つまり元々は国家儀礼だったものを人々が再解釈したものであり、近年では琉球の歴史ロマンに触れる体験学習機会や個人の礼拝にも利用されている。
- 現在の東御廻り（アガリウマーイ）のコースは、首里の園比屋武御嶽を出発し、与那原の拝所（御殿山、親川）を経て佐敷に入り、場天御嶽、佐敷上グスクをまわり、知念・玉城ではテダ御川～斎場御嶽～知念グスク～知念大川～ヤハラヅカサ～浜川御嶽～ミントングスク～玉城グスクという行程で巡るのが順路だとされている。東御廻りの対象となる拝所は歴代の国王により整備・改築されてきた歴史を持つ。

このように、アマミキヨや穀物起源など国の始原の記憶、有力按司が群雄していくグスク時代の到来、尚巴志の三山統一と第一尚氏王統の樹立、聖性にもとづく東御廻りの発祥など、琉球の歴史が重層的にパッケージ化されている点が南城市の特徴だといえる。言い換えるならば、歴史のときどきの局面においてはじまりの物語を生み続けてきたのが南城市であり、「琉球発祥の地」としてのアイデンティティをそこに見出すことができる。



南城市は、アマミキヨが流れ着いた神話や穀物が伝えられた神話の舞台であり、農業が定着しはじめた頃に有力だった地域だと考えられます。それはやがて按司という地方勢力を生み出すようになり、按司の居城だったグスクが発達していきます。これらの有力按司の中から、のちに尚巴志という英雄が生まれ、各地の按司をしたがえて、三山に分かれていた琉球の国家統一を成し遂げます。尚巴志の偉業によって誕生した琉球王国は、徐々に国家としての体裁を整え、国王とそのオナリ神である聞得大君がそれぞれ政治と宗教の頂点に位置する集権体制をつくりあげていきます。斎場御嶽や久高島などの聖地は、このような国家体制に権威を与え、霊的に保護するための国家儀礼が行われた場所です。そしてこれらの地を巡礼する東御廻り（アガリウマーイ）という習慣を近世の人々は生み出し、先達たちに敬意を表してきたのです。

2）歴史文化まちづくりコンセプト

「南城市歴史文化基本構想」は文化遺産を保存するためだけでなく、まちづくりや景観形成における資源として文化遺産を活用するためのマスタープランとなるものである。そのために上記の南城市の歴史文化の特徴と関連計画の位置づけを踏まえて、文化遺産を最大限に保全し活用したまちづくりを進めていくためのコンセプトを設定する。

南城市総合計画　基本構想（2008～2017 年）

市の将来像

≪海と緑と光あふれる南城市≫

自然の恵みである「海」と「緑」と
太陽・歴史資産・地域活力の「光」が一体となって発展する都市

まちづくりの目標

（1）地域に根ざした活力ある産業のまちづくり
（2）心豊かな人材を育む教育・文化のまちづくり
（3）温もりあふれる福寿（健康・福祉）のまちづくり
（4）市民と相互理解を深める交流のまちづくり
（5）安全で安心、快適な暮らしを支える住みよいまちづくり
（6）人の和が支える市民主役の協働のまちづくり
（7）市民の心で世界へつなぐまちづくり

南城都市計画
都市計画区域の整備、開発及び保全の方針

歴史交流田園都市圏
人と自然・文化が調和した福寿で活力に満ちたユイマールのまち

南城市景観計画
（平成 23 年度策定）

暮らしのなかで自然・歴史・文化が薫り、人々に癒しと感動をもたらす美しい景観のまち　南城

南城市
観光振興計画

自然・歴史・文化が織りなすハーモニー
こころとからだの健康・癒し　なんじょう

連携

南城市歴史文化基本構想

緑・グスク・人　琉球発祥を感じる歴史文化のまち

南城市には琉球石灰岩が発達し、段丘には緑地や湧き水等の自然資源が豊かで、それらに調和してグスクに代表される文化遺産が数多く分布しています。南城市のこのような空間特性と歴史文化景観を保全しながら、古き歴史文化を活用した新たなはじまりの物語を紡いでいくために、上記を南城市の歴史文化のまちづくりコンセプトとして設定します。

3）歴史文化まちづくりコンセプトの実現イメージ（例示）

上記の歴史文化まちづくりのコンセプトを実現するために、今後は市の関連部署と協働して施策を進めることになるが、その実現イメージを以下に示す。

緑・グスク・人　琉球発祥を感じる歴史文化のまち

文化遺産に関する情報発信

市民や県民、観光客が南城市の歴史文化特性をしっかりと理解することができるように、市域に分布する文化遺産の由来などの情報をこれまで以上にわかりやすく発信し、また情報に接する機会・媒体を増やす。

関連部署：情報推進課、まちづくり推進課、生涯学習課　等

文化遺産の単体整備・面的整備

本構想・計画に位置づけられる文化遺産について、必要に応じ修復・復元、保存・劣化防止、原状回復、アクセス整備、案内板設置等を図るとともに、他の文化遺産についても同様に措置し、一定範囲の歴史環境の再現、ルート化の促進など面的な整備を充実する。

関連部署：まちづくり推進課、都市建設課、田園整備課　等

人と文化遺産の新たな関係の創造

文化遺産と地域の結びつきを維持・強化するとともに、新たに楽しみや生きがい、学習、文化創造などの要素を付加してリニューアルすることで、市民や住民主体の文化遺産の動態保存・順応的管理につなげる。

関連部署：観光・文化振興課、産業振興課、生涯学習課、教育総務課、社会福祉課　等

歴史的風致、文化的景観の維持・向上

文化遺産を取り巻く環境や景観ごと保全することが、文化遺産本来の魅力やまちの風致の向上につながるため、これを積極的に進めるとともに、文化遺産にかかる開発行為などについては、庁内関連部署や関係機関と密に協議し連携した対応を図る。

関連部署：まちづくり推進課、都市建設課、田園整備課、生活環境課　等

地域活性化に文化遺産をいかす

市が進める観光や市民活動等の施策と連携して、文化遺産を活用した取り組みを多数創出するとともに、文化遺産を紹介するガイド、インタープリター等の人材育成を進め、地域を総合的に元気にする。

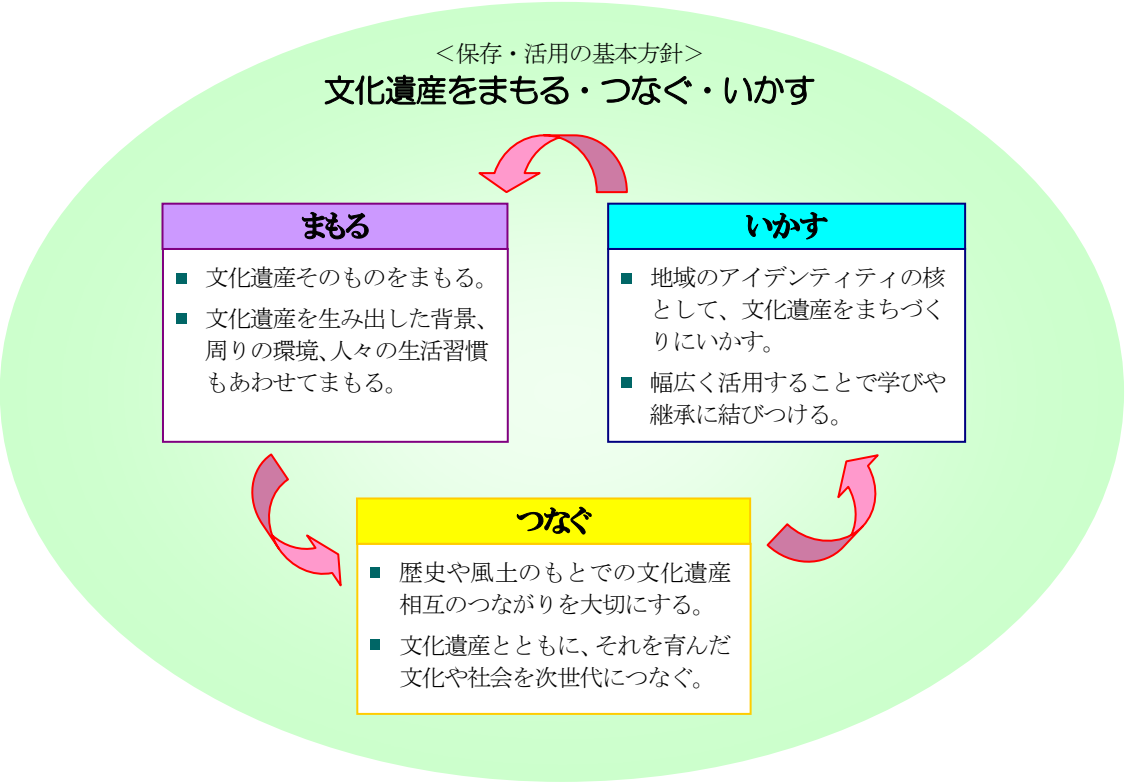
関連部署：観光・文化振興課、まちづくり推進課、生涯学習課　等

合併後の南城市の共通CI（地域アイデンティティ）の確立と発展

(2) 文化遺産の保存・活用方針

1) 基本方針

南城市の歴史文化のまちづくりコンセプトにしたがい、都市計画部門や農業部門、産業部門等と連携しながら、文化遺産をまちづくりに活用していく。それによって地域の魅力や活力が高まり、人々が豊かな文化を享受することにつながると考えられる。そのために文化遺産とその周辺環境を総合的に保存・活用するための方針を位置づける。



2) 具体化方針

文化遺産の魅力は、人々の目にふれるように顕在化させ、共有していくことが大切である。その方針として、以下のような具体化方針を設定する。

●文化遺産そのものの魅力向上

- 文化遺産を良好な状態で保全・維持する
- 劣化している場合は地域と協議し、必要に応じた補修や復元整備を行う
- 眠っている未指定の文化遺産や歴史的魅力を掘り起こす

元の姿に修復したカー（仲村渠樋川）

わがまち探検で文化遺産を発掘

●文化遺産を支える環境や技術の保全・維持

- 御嶽林、斜面緑地、水系などを保全する
- 文化遺産一帯の景観、集落景観を良好に維持する
- 農業技術、工芸、食文化などを保全・活用する

豊かな水をもたらす背後の緑地

グスク立地の基盤を物語る眺望景観

●文化遺産を知る・体験する機会と場の拡大

- 文化遺産にふれる・学習する機会を充実させる
- 拝みや祭事を継承し共有する機会を充実させる
- 文化が生成する現場を体験する機会を充実させる

伝統芸能の上演

稲作発祥伝説の地で米作り体験

●文化遺産を伝える方法の工夫

- 南城市の歴史文化を楽しく紹介できるインタープリターを育てる（人材の発掘、ガイダンス技術の向上など）
- ツールを充実させる（教材、展示、サイン案内、インターネット活用など）

ガイド施設と案内人（緑の館）

貴重な文化遺産の展示公開

●文化遺産の活用促進

- 文化遺産やその空間を交流拠点に活用し、魅力を向上させる
- まちづくりの取り組みのなかで歴史文化にスポットをあて、大人も子どもも楽しめる活用方策を考える
- 地域住民と観光客の交流イベントなどにも活用し、文化遺産の魅力を外部にも開放する

歴史の道のマラソンコース

地域の食文化を発信する豆腐サミット（津波古）